



9. 吉林省民族楽団での演奏活動

——楊琴奏者・音楽家としての趙勇さんは、吉林省民族楽団での演奏活動を通してその才能を磨いて行かれたのですね。楽団の演奏会は、どんな所で、どのように行われていたのですか。

私たちの楽団は吉林省の民族楽団ですから、吉林省を中心に各市・各町を回って演奏をしていました。演奏会でよく使われた会場は吉林省賓館とか、大きいところでは長春市体育館などです。当時は、すべて国からの指示で、指定されたところへ出向いての演奏です。お客さんも今のようにチケットを購入してではなく、国からの招待です。国の宣伝であり、国家の威信を示すものだったのです。

中国は広大で、同じ漢民族だとは言っても、各地方によって生活習慣が違う。例えば四川省と私の吉林省では習慣も大きく違う。同じように文化の面でも違う。音楽についても各地方でそれぞれ特色があり、メロディーにも違いがあります。例えば、上海地方には上海地方の、広東地方には広東地方独特のメロディーがあります。

私の東北地方吉林省には、吉林省独特のメロディーがあり、民族音楽があります。私たちの楽団は、地元東北のメロディーを取り入れて作曲したり、編曲したり、演奏したり、歌ったりする活動です。地方の代表的なものを発表するのです。演奏の形も大グループ（60～70人）や小グループ（20人前後）での演奏など様々です。

私は楊琴演奏のほか、小グループで演奏する曲の作曲や編曲もしていました。楽団には民謡を歌う歌手も多数います。その民謡の編曲も私が担当していました。私は大学を卒業したばかりでしたが、大忙しでした。しかし、これは私にとって大変な勉強になり、後々の大きな力となっていったのです。楽団の上層部では、後々には私に作曲家・指揮者として活躍することを期待していたようです。

10. 中国の民族音楽

——東北地方の音楽は趙勇さんの「吉林省民族音楽楽団」で演奏されますが、ほかの地方にもそれぞれの民族音楽演奏の楽団があるのですね。

そうです、大小さまざまたくさんありました。中でも一番有名なのは、当時、中国四大民族音楽楽団といわれていたものです。成都の「四川省民族音楽楽団」、上海の「上海市民族音楽楽団」、北京の「中国中央民族音楽楽団」、私たちの「吉林省民族音楽楽団」の四つです。国営の楽団です。

——国直轄ですか。

そうです。だから国の指示に従っての演奏活動になるのです。

——音楽を言葉で説明することは困難かもしれませんが、例えば東北地方の音楽の特徴とはどんなところにありますか。

うーん、メロディーを聞いてもらえばすぐわかると思いますが、内省的なところはなく明るいメロディーばかりです。明るくてテンポも速い。私の日本語ではうまく表現できないが、一言でいえばそう言えます。

笑い話ですが、東北の人がスーパーなどに肉を買いに行きますと、少なくとも500gから1Kg以上は買います。上海の人は多くても100gぐらいしか買わない。野菜を買うのも同じようです。ここに東北人と上海人の生活習慣の違いが表れているように、音楽においても同様で、東北の音楽はおおらかで明るくて楽しい。美しいメロディーは上海近くの音楽に多い。広い中国ですから住んでいる地方によって生活習慣が違い、文化や人間の気持ちも違います。当然、音楽にもそれは反映されてきます

私は大学時代、全国の民族音楽をたくさん聞き勉強しました。今でも或るメロディーを聞かされても、どの地方の音楽であるかすぐわかります。90%ぐらいはね。

もう一つ、中国の民族音楽は、実は中国の地方演劇と深いつながりがあるのです。各地方で演じ続けられてきた演劇にも、それぞれの特色があるのです。例えば、北京の京劇、上海地方の越劇、四川省の川劇、山東省の呂劇、東北の吉劇など、まだまだあります。これらの地方演劇と地方の音楽である民族音楽とは密接な関係をもっているのです。例えば、ある地方の民謡から劇が構成されて演じられる。音楽と演劇は一体的にその地方の特色を育んできたのです。

1 1. 「満族舞曲」作曲のころ

——趙勇さんが生まれ育った吉林省長春市は、中国の東北地方で少数民族の一つである満族（満州族）が多数住んでいるところですね。

そうです。万里の長城の外側で、満族や蒙古族（モンゴル族）が多く住んでいます。満族は中国最後の王朝である清王朝を建てて約250年中国全土を支配した民族です。しかし、自民族の文化を守らず漢文化になじみ、どんどん漢化していったのです。その後の中国は清王朝の崩壊、その後の動乱、そして毛沢東の時代へと移って行きました。

毛沢東の時代は、共産党を讃える文化です。民族文化など問題外です。満族発祥の地である東北地方でも満族の文化は風前のともし火、消えかかっていたのです。

そして毛沢東の死です。私が住んでいる周りには満族の集落もたくさんありました。毛沢東が亡くなってしばらくすると、今までは禁じられていた祭りやいろいろなイベントが満族の集落で行われるようになってきました。お祭りのテーマは豊作祈願であり、神への祈りです。宗教的な雰囲気もあります。民族の衣装をまとい、独特のメロディーに合わせて男女が踊ります。今まで消えかかっていた民族の踊りや歌を表現しているのです。

私にとっては生まれて初めて観るものでした。とても感動しました。すばらしかった。祭りの人々の願いや喜びが伝わってきました。この体験がもとになって、私は「満族舞曲」を作曲しました。忘れ去られようとしていた満族のメロディーを掘り起し、満族の豊かさを表現しました。この曲は、吉林省のラジオ局で放送され、更には全国のラジオ局から放送され大好評でした。全国の音楽家をはじ

め、多くの人たちから称讃されました。大変嬉しかったです。

12. 王^{おうえん}艶さん（奥さん）と結婚

—奥さんの王艶さんは今、多久市で「大清花」という中華料理店を開いておられますが、本来は琵琶奏者で音楽家であったのですね。王艶さんとの出会いのころから結婚までのころのことをお聞かせください。最初に出会ったのは・・・。

同じ中学校だったのです。入学も同じ。前にも話したように私は学区外の実験中学校に入ったのですが、ここは彼女の学区内の中学校だったのです。二人とも同時に同じ中学へ入学したのですが、もちろん最初は彼女のことは知りません。

前にもお話ししたように、当時この学校の音楽活動はずば抜けていました。私も入学するとすぐ民族楽器演奏の部活に入りました。そこに彼女（王艶さん）も入ってきたのです。彼女は琵琶で、私は楊琴です。その後中学卒業まで、同じ民族楽器奏者として練習を共にしてきました。時には「吉林省民族楽団」の団員に来てもらって指導を受けることもありました。

—同じ部活をする中で彼女へ惹かれるものがあったのですね。

うーん、まだこのころは特別の思いはありませんでした。私の卒業頃は前にも話したように大変忙しかった。彼女は卒業後、「吉林省芸術学院」（3年制、日本では短大にあたるかな）に進んだ。ここは音楽・美術・書等の学科があります。私は、その後いろいろなことがあって「瀋陽音楽学院」に入るのです。ここに入ってから彼女との手紙のやり取りが始まったのです。大学卒業するまで続きました。

—この間に彼女への思いが動くのですね。

そうです。手紙の中でも彼女はとても優しい人で、いつしか彼女への思いが少しずつのって行きました。

—彼女の方はどうだったのでしょうか？

うーん。彼女の方も同じだったようです。大学は夏休みが長い。私は夏休みになると彼女を誘ってよくデートしていました。そんな中で、お互いに心が惹かれていったのは間違いありません。

—彼女は芸術学院卒業後、すぐ民族音楽楽団に入るのですね。

そうです。正式には彼女の方が先に入団しています。私は大学を卒業するとき、教授から大学に残ってくれないかと言われたのですが、それを断って楽団に戻ったのです。もちろん楽団との約束もありましたが、彼女が楽団にいたことが大きな理由です。

私が楽団に戻ってからは、同じ演奏者として彼女とほとんど同じ活動をしておりました。もうここではお互いに心を許せる人として付き合っていました。いつの間にか、先輩の楽団員たちからも二人の間柄を認められるようになり、結婚を勧める声も上がるようになりました。そのように、私は大学を卒業し、長くせずして結婚しました。お互いの両親も心から祝福してくれました。

—結婚は何歳の時ですか。

うーんと、24か25のとき・・・。そう、25歳になっていました。

あのころは結婚できる年齢の決まりがありました。二人の年齢を合わせて50歳以上にならないと結婚届が受け付けてもらえなかった。彼女も私とは同級生ですから、お互いに25+25で丁度50歳になっていたのです。なんとか年齢はクリアしていました。私は彼女より2か月ほど上になります。結婚したのは4月です。

——結婚しようという気持ちはどちらが強かったのでしょうか。

二人ともいっしょ。同じ気持ちだったのです。中学時代からいっしょだったからこうなったのだと思います。翌年には長男が生まれました。子どもが生まれたことで、彼女は長期間出張の演奏活動は中止しました。私たちの演奏活動は、省内の各地区を回ってのものですから、1回に半月や20日間ぐらいは家を留守にしなければなりません。楽団の方でも彼女には子どもの養育に専念できるように図ってくれました。

このころの演奏活動では、都市部だけではなく農村部へもよく行きました。だから、当時の農民のさまざまな様子も見えています。国から指定で、人民公社の豊かな村などにも招待されたこともありました。食事ではさまざまな豚肉の料理が出され、私たちには大変なごちそうでした。また、軍隊への招待も多かった。軍隊も物は豊富で、ビールなども飲み放題であった。私たちの演奏活動での楽しみの一つは、このように当時としては珍しい、いろいろな地方でおご馳走にあずかることでもあったのです。

1 3. 「北国の春」「知床旅情」

——また音楽の話に戻りますが、民族音楽以外で今までに趙勇さんが心惹かれた歌や音楽にはどんなものがありましたか？

そうですね、先にもお話ししましたが、当時の社会状況ではヨーロッパの音楽はほとんど聞くことはできなかった。日本の音楽も同じです。毛沢東の時代はすべて禁止です。鄧小平のころになって少しずつ日本やヨーロッパの音楽も聞けるようになってきました。大学に入ってからやっとヨーロッパや日本の音楽に接することができたのです。

大学に入って、たくさんのヨーロッパ音楽を知りました。大変すばらしいと感激しました。教科書などで多くの音楽家も知りました。しかし、当時は旧ソビエトとの関係で、ロシアの音楽家やその作品が多く取り上げてあった。チャイコフスキーとか……。大学で学習する音楽作品などもロシアの作品が多かった。

——日本の音楽は？

日本の音楽はもっと少なかった。そうですね、私が大学1～2年のころ「北国の春」が入ってきたと思う。中国の有名な歌手が同じメロディーを、中国語に翻訳した歌詞で歌って、全国ではやりました。後に私が吉林省楽団に入ってから、楽団の一人の歌手がこの歌を歌うことになり、編曲を私が担当しました。この編曲を私が尊敬していた先輩から大変ほめられたことを覚えています。

その後しばらくして「知床旅情」が入ってきた。このメロディーはすばらしい。今でもこのメロディーはすばらしいと思っています。私の演奏会には必ずこの曲は持って行きます。

日本の童謡もすばらしい。これは日本に来てから知りました。たくさんありますね。この童謡については私もいろいろ勉強しました。日本の童謡はいいですね。演奏会ではこの童謡も入れるようになっています。

(2013. 10. 23)